

やらなければできない

テノール歌手 松浦 健 (高25)さんを訪ねて

同窓会110周年記念の校歌CD『110周年記念  
龍城山下のなかまたち』の監修を務められた

国際的な活躍の傍ら教鞭を執られる氏を勤務先の昭和音大にお訪ねした。菲高時代はテニス部と伺った。いつどこでテノール歌手に興味津々。

松浦 清水町生まれ長泉町育ち。父親は教師で教員野球チームの選手として国体出場のスポーツマン。その影響もあってか中学に入ったから運動部にと考えテニス部に入った。下級生はうさぎ跳びの毎日だったが、上手い先輩のフォームを研究し家でイメージトレーニングを続けた。3年生によるオーディションのとき、初めて打ったたままのナイスショットが先輩たちを驚かせ、いきなりレギュラーに抜擢された。そのせいか同級生とぎくしゃくしたこともあった。

そんなある日、自転車で友人宅へ向かう途中、突然車が自分の目の前にきた。必死でペダルをこいだが、あと1歩のところまで避け切れず車は自転車の後部にぶつかつた。弾みで身体が屋根のあたりまで飛ばされた。お店の看板が眼下

に見えたのを覚えている。とっさに授業で習いたての柔道の受身で着地したが足を大怪我した。半年間テニスができなかった。その後リウマチ菌にも冒され両手が腫れ激痛のため何も握れない。そんな自分の荷物を持ち給食を食べさせてくれたのは、以前ぎくしゃくしたテニス部の仲間たちだった。結局1年間練習できずに臨んだ中体連。やり残した思いが残った。

高校入学時、両親とは文化部に入り勉強をがんばる、運動部に入ったから大学には行かないと約束した。山上から聞こえてきた

ボールを打つ心地良い音と共に中学時代にやり残した思いが蘇り、即入部した。運動部に入ったからには大学は諦め地元の銀行に就職しようと思つた。ところが高2で進学を決める頃、周囲の友人を見て自分も大学進学



道子 友人に報いるためにもがんばろうと入学した音大は女の園だった。同期の男子学生は7人にひとり。

男臭い部室の世界しか知らない自分にとっては戸惑いもあり、なかなか馴染めなかった。その頃最初に師事した先生の息子さんから当時最新鋭のBOSE (ボーズ) のステレオを聞きに来ないかと誘われた。その時聞いたオペラに心が

を考えるようになった。それまで勉強らしい勉強はしてこなかったが、中学時代から仲間とバンドを組みギターを弾いていたので音大へ行こうと決めた。そして東京の先生のところにレッスンに通い始めた。

高3最後の大会も間近。レッスンの先生方からはテニスを早く止めるように言われていた。しかし練習を続け、個人団体とも県大会出場を決めた。当時は県大会を制すことは全国を制することでもあった。県ベスト8の試合。優勢だったが、ここで勝つと音大への夢が遠ざかると思いがふとよぎり、そんなことを絶好調の前衛に話してしまつた。すると

一気に流れが相手側にいってしまい、やはり勝ちたいと思いと直したときには手遅れだった。友人に報いるためにもがんばろうと入学した音大は女の園だった。同期の男子学生は7人にひとり。このとき、ドイツ震え感涙した。このとき、ドイツ発声と歌曲を勉強する学生が多い大学であったが、オペラ歌手になるべく勉強することを決意した。私は声も小さく友人たちは無理だと口々に言ったが、天才的な疋田生次郎先生との出会いのお陰で声量も見聞について現在に至っている。同期の男子で教室の前列を陣取り、負けてなるものかと勉強に邁進した。「やらなければならない」とよく言われるが、「やらなければできない」のだと改めて気づいた。大学院修了後、初めて出演したオペラ『魔笛』(王子タミーノ役)の演出家、恩師大谷潤子先生のオペラ鑑賞ツアーでイタリアに滞在したとき、ミラノには珍しい大雪が降っていた。プッチーニのオペラ『フ・ボエム』の3幕の冒頭のシーンを見ているようで、その音すら聞こえてくるように思えた。さらにヨーロッパの街並みのいたる所からオペラのシーンの音が聞こえてくるように感じた。ますますオペラが身近なものに感じられ、後に留学する必要性も感じ取った。

帰国後も氏の活躍は続く。新国立劇場、藤原歌劇団を中心に外国の一流歌手との共演多数。故園伊玖磨氏からも声をかけられ、天覧演奏も絶賛を博した。海外での活躍も多く、第24回ジロー・オペラ賞も受賞されている。そんな世界的な活躍と、お話される時の人懐こさというか少年のような無邪気さが結びつかず不思議な感じがする。今後ますますのご活躍を。